

2019.10.06 第1主日聖餐礼拝

ネヘミヤ 3:1, 10-12 「まず、足元から」

聖書

1 こうして大祭司エルヤシブは、その仲間の祭司たちと、羊の門の再建に取りかかった。彼らはそれを聖別して、扉を取り付けた。そしてメアのやぐらのところまで聖別し、ハナンエルのやぐらにまで及んだ。

10 その傍らではハルマフの子エダヤが自分の家のそばの部分修復し、その傍らではハシャブネヤの子ハトシュが修復を行った。

11 その続きの部分は、ハリムの子マルキヤと、パハテ・モアブの子ハシュブが、炉のやぐらと一緒に修復した。

12 その傍らでは、エルサレム地区の残りの半区の長、ハ・ロヘシュの子シャルムが、自分の娘たちと一緒に修復を行った。

はじめに

お祈りして導きを得たら、祈ったことに対して行動しなければいけません。ネヘミヤはエルサレム神殿の城壁修復のためにペルシア王にエルサレム帰還を願い出て、王の寛大な措置の下、エルサレムに戻って来ました。祈ったことをいよいよ実行するときが来たのです。「天の神ご自身が私たちを成功させてくださる」(ネヘミヤ 2:20) という信仰に立って修復に着手しました。そこには、神さまの助けと共にネヘミヤに与えられたリーダーとして卓越した指導力がいかに発揮されています。因みに、ネヘミヤはリーダーシップの学びのためにしばしば引き合いに出されるほど、指導者として学ぶ点が多くあります。さて、城壁の修復はどのように進んだのでしょうか。

1. 修復工事の概観

修復の様子はネヘミヤ 3 章全体に記されていて、その中の一部だけを今朝のテキストにしました。修復の概観を簡単に纏めると、ネヘミヤは規模の

異なる約 40 工区を約 41 のチームに分担させ、それぞれ熱意をもって仕事に取り組むように工夫しています。特に破れのひどい城門はしっかりと修復しなければならず、全部で 10 の城門が記されています。この再建工事にはエルサレムの住民だけでなく、その周辺の住民、すなわちエリコ（2 節）、テコア（5 節）、ギブオンとミツパ（7 節）、ザノアハ（13 節）、ベテ・ツル（16 節）、ケイラ地区（17 節）も加わっています。さらに、祭司（1 節）、金細工人（8, 31, 32 節）、香料作り（8 節）、レビ人（17 節）、商人（31, 32 節）など、普段は土木工事に携わることのないような人も加わっています。何と 3 章には「修復」ということばが 29 回も出て来ますが、総出で組織的に修復が行われた様子がわかります。

このような修復の様子から、以下二つのことを学ぶことができます。一つは連携の大切さ。もう一つは身近なところからの修復ということです。

2. 連携の大切さ

「彼らの傍らでは」「その傍らでは」「その向こうでは」「その続きの部分は」ということばが、計 31 回出てきます。冒頭に約 40 工区、41 チームの大工事であったことを述べましたが、それぞれが個別の修復工事を担当しました。しかし、皆がバラバラではなく連携して工事に当たっていたのです。ある人が工事をすると、別の人がその傍らで工事をし、さらにほかの人がその向こうで工事をするといった具合に、個別の工事でありながら、互いに繋がり全体として進んでいた様子が伺えます。その全体を指揮・監督する立場にネヘミヤがいたわけです。

連携プレーの大切さは企業の中でもスポーツの世界でも、およそ人が関わる場所ではどこでも取り上げられますが、教会もしかりです。キリストの福音を届けるための宗教団体として教会は存在しています。それぞれの分野を担当しながら、一つの組織体として活動しています。例えば、毎週の礼拝一つとっても、司会者、奏楽者、説教者、祈禱者、献金、受付、アッシャー、音響などの奉仕者がいて、礼拝全体を導いています。礼拝の中で子ども向けの学びの時間を持っていますので、そのために教会学校教師・スタッフが立

てられています。11/24 に久米小百合さんのクリスマスコンサートを行います。ミッション部の方々が企画準備にあたり、教会内の整備片付けなどは庶務部の方々が対応しておられます。私たちのような小さな教会でさえも、たくさんの方が奉仕に加わり、教会を運営してくださっています。それぞれの持ち場で与えられた務めに当たりながら、キリストのからだである教会を建て上げるために皆で一致して進んでいます。目に見えるところで活動する人もいれば、人の目には隠れたところで真実に奉仕に励んでくださる方々もおられます。そのすべてが繋がっていて、どれもが大切な奉仕なのです。教会の奉仕が個人プレーにならないように注意し、互いの繋がりを大切にしていきましょう。

そして、ネヘミヤがリーダーとして全体を指揮したように、教会のリーダーはイエス・キリストであり、牧師も信徒も皆キリストに仕える主のしもべなのです。イエスさまの恵みが教会の中にいつも溢れているために、互いに助け合って福音のために仕えて行きましょう。

3. 身近なところからの修復

城壁の修復は、エズラ記にある先のエルサレム第二神殿の再建と同様に大がかりなものでした。規模が大きいとついでどこから手をつけて良いか分からなくなります。一人の人間ができることはごく限られたことですから、大きな規模の中で、自分のしていることが無意味に感じることもあります。

ネヘミヤは大きな目標をしっかりと掲げながら、その目標達成のために、まず足元から修復することを勧めています。それが「自分の家のそばの部分修復し」（10、23、28、29、30 節）ということばの持っている意味ではないでしょうか。「自分の家のそば」から着手することで、手抜き工事をさせないための配慮とも取れますが、それ以上にここには、まず自分の置かれた場所から修復することの大切さを感じます。たとえば、大祭司が担当した「羊の門」（1 節）はいけにえとなる羊が通る門だそうで、祭司の務めと関わる部分の修復を担当しています。

「身近なところ」「足元」からの修復といったとき、皆さんは何をイメージ

されるでしょうか。ある人は、今教会内で与えられている奉仕を思い浮かべるでしょう。またある人は、自分の身近な方々に伝道することにもっと積極的にならなければならないと思うかもしれません。それも足元からの修復の一つですが、もう一つ心に留めたい修復があります。それは家庭です。夫婦関係、親子関係の修復です。家庭の修復は教会の祝福に直結しています。世代交代や信仰継承の話題があちらこちらから持ち上がります。そのことに教会は真剣に向き合って次代へと歩を進めて行かなければなりません、教会にだけ世代交代や信仰継承の責任があるのではなく、家庭においてもこの問題を真剣に受け止め、祈っていかねばならないと思います。身内ならではの修復の難しさがあることを承知していますが、それを放置しておくことはさらに修復を困難にさせます。小さな破れは小さいうちに修復することが鉄則です。

ネヘミヤの城壁の修復を機に、私にとって修復すべき箇所はどこなのかをそれぞれ考えてみましょう。神さまから修復箇所を示されたら、祈りつつ取り組んでみようではありませんか。そのとき、一人で取り組むのも良いですが、祈りの仲間と連携し協力して修復することも益です。教会としても個人としても聖霊の助けを仰ぎ、身近なところから、足元から修復作業に着手しましょう。

結び

城壁の修復という難事業を、皆で連携して取り組んだイスラエルの姿勢から、横の繋がりの大切さを学びました。今や世の中は、自分のことは自分のこと、人のことにまで関心を払う余裕がない時代です。そのような世の流れに教会も巻き込まれてはいけません。自分のことに集中しながらも、他の人のことも心に留める優しさを持って主に仕えて行きましょう。

もし、破れを修復する必要があるなら、それは遠くの誰かの話ではなく私自身の話であり、私の足元から修復しなければいけないのです。皆が互いに連携して、自分の足元から修復を始めるとき、それは全体としても着実に修復が進んでいることになるのです。今週私たちはまずどこから手をついたらよいか主に祈ってみましょう。まずは、そこ（祈ること）からです。